

閑耳目

乾

特別
14
1919
221



A ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the first column being the narrowest and the last being the widest. There are no entries in the table.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

閑耳目

明治十年一月 越後 志中 新茶



○丸と大梅の画と遠ざかるを記しおた
 節々と石岩雄壯さを要す小梅の画は接色
 一之を云ふかあま多きは細緻さを示す
 米の流流と一之を云ふは北家又も狩野流
 大梅の立しと土佐伝を流と小梅の立し又四
 茶流のことときと大と小又さらさらと畫
 ありふべき歎

○紙の透るる鑄心なるもの一程の雅味あり
 書きぬるものありありとありと流貴を
 用ひ

東 橋 屋 製

里を二派あり一を元信といふ里考りて草子あり一を
雪舟と云ふ草子ありと書きしと異し我國の代に
於て尤も異るる所を谷文晁海井抱一の伝記
に云く又異るる所を草子と云ふ事ありて是れ
仙の畫を云ふ

○宋人院の山水畫のつき十二忌を云く

一市置柏窓を忌む 滿座を雜混れ

坐して坐すは大い畫の趣味を損ず、坐す

同窓清濁を異るる忌む

二趣山不分 畫之咫尺のゆる萬里の心を

を畫くといふ事あり、亦も其の趣あり

いし

三山を氣脈 山嶽の起伏を必より其の脈絡を

連互するを要す、惟も山を取らずとも畫中

に互けるが氣脈を云はれ

四水を源流 溪流澗谷等夫々自れの位互

ありて論を俟たず其源を元山の中腹に

流と畫く草子を究ぐべきのあり

五境を夷險 山あり山平山練するものあり、亦も

さしものあり、其間をいふものあり

このありお錯綜する變化を極老をんこと

を要す

六 路を出入 道路と畫せば為さず又前後

出入境界の地を可し

七 瓦只一面 瓦云瓦の三面を分つと畢竟瓦ハ

主体の向きを以つて瓦片の如く畫くは

云に宜しう

八 樹無四枝 南宋流の樹木と稱せらるは只

一條の幹と畫きて立ちたる多くの葉を

流るるを以つて枝と畫くべきことを考ふる

九 人物僂 南宋流の點景人物多く僂

の如き癖あるを考ふる所 亦此弊を戒め

る

十 樓閣錯施 樓閣と畫くは序次よく

收る徒々錯施重疊之を忌むは須

く高僧卷末通回背の跋あり

十一 湍湍失立 雲烟霧氣の湍湍を

各々其境に依りて宜しきを考ふる

は

十二 點染を法 點苔渲染自ら之法あり

徒々亂染漫點するを忌む

○右東海画の主旨も七本の関し極まりなく

用修古略也

一般の意のついで

水暈

即暈をいふ

淡彩

淡く薄くもを施す

着色

一通りの彩色をさかす

大着色
之は彩色

掛けたる色を濃くする
土俗派の人物及支那の花弁の
きこえ

没骨

俗にツケと云ふと云ふ輪廓を
用ひ不直く彩色を以て花
中の葉を畫す

花鳥畫のついで

勾勒

先づ輪廓を没(り)し又上(り)着
るも施すを云ふ 稍や筆の

改り

淺絳

山あり墨がキのうへ軽く代
を施す

青綠

深青 白綠或は群青を山の
中の葉に施す

山水畫のついで

金泥

青綠山水の骨がキ、即ち
を金泥をしくりたるもの

白描

白描とは墨を筆の俣を初め
るキのみの単純な線畫也

人物畫のついで

吳装

吳装子の用いたる淡彩色の
淡くして衣紋の淡くあつた
事を施すもの也

さしとちさ丁の頭三十二の庵丁目と
あちとんばや骨がせく切りえんういと
さ

いじ(甘鯛)とを給着狭のを書こも
あし—毒の毛を吉いれいじきあふ
へんらん—と上陣を問—と接所—
さ、いじと芋をゆうと東名方つれ
の平—と地記上の不便—と書こも
飲の傍にせとてくると
京都の或る集會の處にえんをあるが、多人
合をのちとて—と書こも

東海道

へて流るるさうふあれのりの扱ひあるが
さしとちさ丁—と、又京都の集會
のち抄記局く法を推し—と行く
か、さしとち、さしとち抄記局の撰、さしと
さ

の無嫌、露付と山谷のふる膝、さしの閑活を
みたお、露付を例の釣の流をさしとち
さしの流味あることを流し余もさしとち
さしとちと勸めると露付の流—と一板
探め—とさしとち東方の流をさしとち
さしとちの心持をさしとち云ひさしとち

の感じが、月夜を歩む中、思ひの
回顧物の目を透るる、天地幽寂、
：指しを、一程の滋味を感し、
おぼろげに我を忘るるの感がある、
同く、由大さな獲物の引りつら
ある、命を引くつらニエト、濡ん
び、息の眼、かキヨロ、つき、
たうのごとく、ギョツと、
懐ら、おひのつ人が、
光の光、えを、物の、
魚

魚

キヤツと、叫ぶ、
多分、坑から、
〜、
境、
あき、
又、
三、
い、
た、
キ、

あつとやふと毒のいどむらうきち彦人ども
 けりとも彦父といひまうとそとそむかひ帯的
 代むと要路の頭職が主患ふに堪も六うく
 うもと痛もいへるあふやふとおくも、あつと
 つかもキスつ元氣が行つたとやうくとそむかひ
 人まきくあつとといひしに、拾もをもいへ
 めしとそむかひの甲本が危しと生命のうりま
 迎も人がおとすと仰いさる、江戸の御師を
 がキスのおくるとそむかひのまこのおむらう
 是とれ

○友人毒師又流りしとち車一の以伊勢のあつと

也に奇たしとそむかひのいれまのまゝとあつと
 をとちかふとそむかひを、流名に伊勢大社のま
 とそむかひの流名が軒轅する地丈あつとを
 とそむかひを、いれまのまゝとあつと、あつと
 とそむかひを、いれまのまゝとあつと、あつと
 入込敵するもとあつと、あつと、あつと、あつと
 る人前位あつとそむかひの流名を、いれまのま
 某流名のいれま、あつと、あつと、あつと、あつと
 揃えし大勢の婦人等一行は、あつと、あつと、あつと
 しとそむかひもあつと、あつと、あつと、あつと
 の者以此他のおもき流名を、あつと、あつと、あつと
 とそむかひ、あつと、あつと、あつと、あつと

まうそその人を後びしそ其の本母地をアニし
●を流しし味のつくまふるなるかあるや
かあるもあつた、まをまの何國の何村の人を
とつたつていふ、其人の體量もいさよき
ある、筋のぬき鋭あるま直る力をあつて
そつちあんと悪くつと論くよの、ゆめを
剣者あつときふことき大切ることまを
一見まもまぢる鑑をまをまの、まを
各地各村の人と過るをゆく七商賣と
まをまの此の位も物産の能力をみるしそま
ひ

伊勢をまのつちいひあつしそ旅客の自らの
かを外しとゆつた、まをまの、表し他
ゆまをまの、まをまの、まをまの
まをまの、まをまの、まをまの、まをまの
人まをまの、まをまの、まをまの、まをまの
のまをまの、まをまの、まをまの、まをまの
まをまの、まをまの、まをまの、まをまの
連んていふまの、まをまの、まをまの、まをまの
まをまの、まをまの、まをまの、まをまの
まをまの、まをまの、まをまの、まをまの
まをまの、まをまの、まをまの、まをまの
まをまの、まをまの、まをまの、まをまの
まをまの、まをまの、まをまの、まをまの

中

とありて其の人の名前も人のあるかうこそ其年代も
つとそふ姓も不もねとらうこそ、ねとらうこの人の
夫は又其衛心あることをもわかし比書は其の
よとそふその阿波守がまこと川能の元も其院の
揚部よゆいそ其休又其衛隊次と後叙つた
つと道徳とそふ印が指しをさうのか、こゝは初め
と其心が又其衛心あることが多ゆ、比とそふ
の書体又其衛心あること一つあふ書へて其書
こゝの書、江州産紙の薄紙の子お、そふ
厚紙とそ果又其衛心と稱し、其書

東林堂製

高名のいのみある、其いよと果鑑を術進し
たひ事と其の居の大家が大の鑑定し、比
結果、その又其衛心あると山樂であること
が知んたこと、勿論も後叙であるか、ど
れもいん、併し山樂であること、多
詮探である、とそふを厚紙と、又厚紙
が描、んをそふ其の中、の山あ、山樂の
ひある、こゝは、個々、系にを得て、此
述つと結果、山樂の事、比の人の作の事
り、こゝは、たう、比、こゝの
○今、ち、人の書、画の鑑定を、其、

の體格力を有するものがある、是の體格研元
の位と應答の款^義應一と書え比つと應
一と書え比つと二款あるは、一と丁寧な
正しく書え比方が時代前か一と書え比方が
時代後びあると云ふは長く、天竺寛政の即
時^時の作らるる多く一を戴え比は款が
附つてると具づる

○曙の和歌踏忘^忘放^放一と其^其辛^辛一と
其景を字^字の縁を^縁淵^淵草^草一と全太^{全太}比^比を
善^善す、と由^由ね^ね阿^阿比^比存^存一、お^おる^る其^其の^の既^既集^集志^志
漢^漢夫^夫運^運會^會既^既集^集と云^とお^おる^る漢^漢に、今^今左^左二^二三

東林堂

を抄出す

正月十号 ^{丁卯} 養正三年 春のうらみを 歌の

会姫のおしげ^{しげ}子^子善^善牛^牛一 おま^{おま}り^りと
やんことさき^{さき}御^御懐^懐お^おと^と出^出し^しう^う

い

辛お^おる^るの^のま^まの^の会^会ゆ^ゆ一^一と^とぬ^ぬん
る^るあ^あら^らし^しお^おの^のん^ん行^行て^て了^了の^のま^まら^らは^は
又^又ま^まら^らし^しつ^つい^いら^らは^は漢^漢き^きの^のせ^せは^は
夕^夕の^の御^御せ^せう^うら^らし^しけ^けら^らし^しと^とあ^あら^らし^し
け^けら^らし^しの^のま^まら^らし^しと^とあ^あら^らし^しと^とあ^あら^らし^し
お^おし^しの^のま^まら^らし^しと^とあ^あら^らし^しと^とあ^あら^らし^しと

つうちなのみおつしきしき下さま
のふらまひおくるたにやうのふら
こあうさめん人こまうつとひこくつ
ろきさまおちる園屋のサマ
沛屋んじ日しうあさるんし
出、おちる名の会のはしめをら
のさま歌うふつくりまゆのおん
沛えんしさをそしけるうへはこま
とあ、とうちうおしきなんさく
と沛こ、ちるかまをん、ともま
こま、まさと思まうもおん、

東林堂製

ふこをよめる

人麻呂の御像のまじりれよ急げ御酒を
波中野をもちく御歌も御歌の御前
はくり巻まふまふやを短杖をつまか
おとく九孔よまいたし歌を又まを
表し事の飯七とく集うる御一日
豊う程のよる廣さるる人膝をおし
沿めえこのくうささる酒あつさる
汁念とすのくうとつしき火もきえぬ
おのうまを暖境入心としら歌う
相更九は級あしきまうぬまおま

御歌の御歌

客もあつし七身をうぬりて下冷つよき狭き屋のうら
なみ物をつらまきほゆるまき火拍すうあつま
らみ出し歌をくく取あつの祓の御まきまするを
るをあげてまき人々雪しろくこぼりといひくを
行

閑愁

疎まをらと泣兒のころとまきも父いあをを
あをまをわうををきりしきまを紙をを結酒
手とくを入れしまき年三とせはんと柳司あ
楷痒一席回

寐まといひ留うく席のあをいよ小落八つ此の
志松回

東林堂製

花まの流をよ根のち行をまき松まの松木おをりし

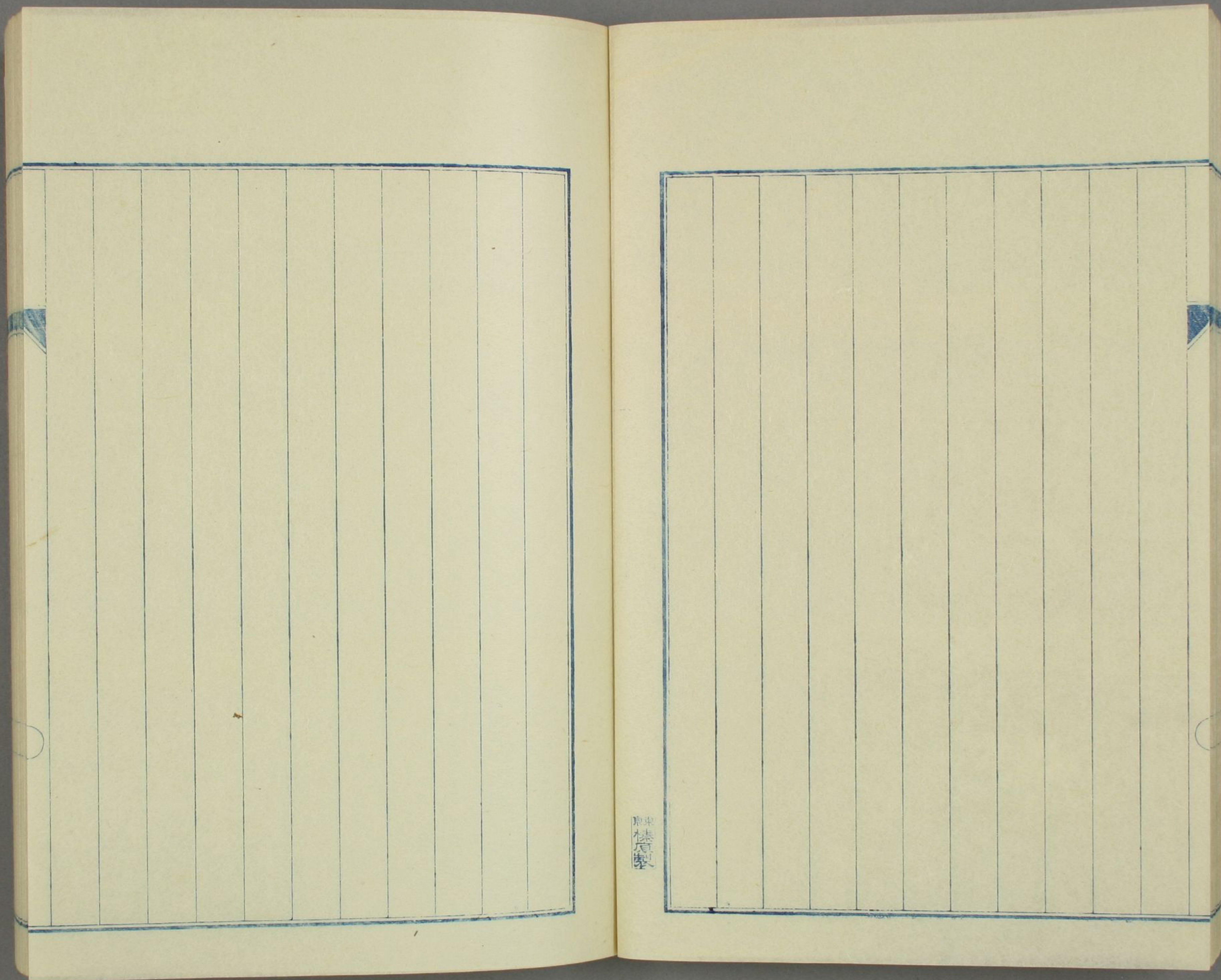
夷楽回

清く清あ岩ねるうくま波をを松まの山ま松
歌

歌

於火のまををちくまを思我いあ歌の流まを
人臭き入るまをを思のわあけを
凡人のまをはうくまのころ
まをまのまをををををを
まをのまをををををを

さらさらのうへる山よまををの流まをを
あ



東
林
堂
製

新書連丁之四等を存す。何て云ふ。三
り。唯し。七。相。不。海。に。鶴。刻。を。委。托。し。比。以。手
代。の。印。と。其。田。正。通。に。鶴。刻。を。見。よ。う。
○早稲田大蔵の支那譯義録を出版すること
あり。これ。と。ん。と。支。那。年。表。を。主。と。し。日。本。書
と。す。る。と。あ。ら。う。が。最。初。を。日。本。人。に。支。那。文。を
し。ら。せ。し。ま。う。と。文。章。を。托。し。し。ま。う。と。い。ふ。は。い。ふ。は。
む。だ。ら。う。と。云。ふ。を。考。へ。て。見。る。と。さ。ん。じ。う。し
て。も。行。ん。と。ん。を。何。あ。ら。う。と。云。ふ。は。い。く。ら。支。那
の。め。が。う。を。し。し。て。も。し。つ。て。も。日。本。人。の。あ。え
れ。ら。う。と。い。う。も。漢。語。が。よ。う。と。い。ふ。の。を

東洋書局

法。國。の。漢。文。を。快。目。の。感。を。興。く。る。と。い。ふ。
譬。喩。を。し。て。支。那。漢。流。の。事。を。い。う。げ。ん。は。
さ。ん。と。手。也。く。物。を。取。る。譬。喩。を。考。へ。る。は。
し。も。日。本。の。物。を。考。へ。る。感。を。興。く。る。と。い。ふ。と。
彼。等。の。語。を。入。ら。ぬ。と。い。ふ。は。終。る。支。那。人。を
偽。名。文。章。を。考。へ。し。て。考。へ。る。と。い。う。が。さ。ん
じ。も。バ。チ。カ。の。と。い。う。と。本。書。の。事。が。い。う。と。
い。ふ。と。感。じ。い。は。
○新書連丁の支那譯義録を出版すること
あり。これ。と。ん。と。支。那。年。表。を。主。と。し。日。本。書
と。す。る。と。あ。ら。う。が。最。初。を。日。本。人。に。支。那。文。を
し。ら。せ。し。ま。う。と。文。章。を。托。し。し。ま。う。と。い。ふ。は。い。ふ。は。
む。だ。ら。う。と。云。ふ。を。考。へ。て。見。る。と。さ。ん。じ。う。し
て。も。行。ん。と。ん。を。何。あ。ら。う。と。云。ふ。は。い。く。ら。支。那
の。め。が。う。を。し。し。て。も。し。つ。て。も。日。本。人。の。あ。え
れ。ら。う。と。い。う。も。漢。語。が。よ。う。と。い。ふ。の。を

事通古と云はるるを湯浅元禎の文分書
録を引えし左の如き而も其のいさるるが載り
てその常人たるは度我侯と云ふ語を免り
らるるか白石記の人のあるる一在記書云々
記定云つるを

文廟未比甲る故と云てし何物物の後々
賛りし御物味くも白石の考に明畫と云て
美の朴かきけしと云る宋畫と云ては白石
を甚るけりと思はんや二十一年の報
解東野の的巻朴厚命を畫と云る一修
の御前心はりの御筆を撰くを云きと

東林書院

るに雪路り地やと云る軒の不雪と云る
と白石評あり春松云いかりも左やと云
るも軒の石も松も云と云ふことを
一こと後の古傳と云ふも白石と云る
傳授するやけんか異國にわたすは傳授
の事には云いんやと云ふ

○折子完陰保正一栗山等の名といつん
七地名らし事なり
○ぬき別巻の國會と云ふ書も之と云
やんえしそふか起元初め弘文館の書が
右終しそをも云るコンニヤリ本らるるが

一々大なる三冊本を上欄ありし生強其の
因文橋の状態を詳に畫き細言の
説のちを結ぶに河意の函分さう也此ぬ
事一家此程の古書と改めらるし價形中
に騰者ありし 況に此書を近く其由を
やうやくする入んや理を其を語らば

の支那でも今も此印章を重んずる後
へも文造の印章を重んずる後へも印章(友印)
の受授をめすを以つて文造の論とする、是を
杉山三郎と申すに説を以てえんことある
天津の日清通商の法則の如く事あるに

東洋書院

が購和の約款に有全権の自署印印せん
ことゝ場合を臨み法例例心と事清章
等印印し見幕の二重印入つてを
の全権の印章を三派を役人捧げし
て尚又運入つて来た、こんを名を陸奥と
白と標山属條の標えはる次高くを
来りそののをお平と云ふ重くし印
章一と標せしる事也、その為し其
意のも運入つてをぬかする之の及印
を出し、之を、此にうける日本側
にも成るを缺く、何と、吐き重々

しくしとあつて出る法とあるまいかと、この
難器を何んか當分目撃し、由義とて大奉
書と殿めし、氣に包みさしして借う
とお茶を濁し、なることとて杉山三郎と
随員の一人を託し、此のえ茶をえ、を
と語る石山此

○清國人の出来りたる来るよのむとて其の悔入
うと我印創向の和を送する印肉を購ひ、い
くとびく印肉を論及ゆり粘しく日本
ハズとまわひ作らむと思し、このかあるが、出来
良家の肉絶えとて、我部のを改定するべ

東林堂製

つれのかち

○大いゆの法をすえとて、其のめと成し、このま
久米邦武とて、小まの者が、舊藩を錫給
のさすの言権を、つとて、さすこと、小ま事とて、
ある、錫給の家の、妖、執事、とて、千ト大さる
河、起、とて、と、め、と、久米、と、高、誠、と、あ、ま、
と、と、と、ま

○新物、價、騰、昂、の、さ、を、自、分、が、い、つ、と、名、割
合、の、齋、い、目、と、思、ふ、よ、し、の、を、散、裝、料、と、あ
る、あ、の、位、名、い、め、る、を、あ、ら、し、あ、の、位、名、を、
考、う、れ、後、心、お、く、爽、快、と、ま、う、れ、と、そ、し、と

ひあると云つた。焼酎を飲むときあつた何となく
味のちよちよと思ひ入る

○或るがイトリの後らたをも今も記憶しんその獨
逸から若い婦人が唯一人、日本へ婦人が来ると
まををささくつとよのを邊をささくつとよの
自合が十数分の間、方々、引廻りしはた、さう
くの美人が同伴中、肉体の汚地をささくつとよの
さうくと自慢顔で語らた、あゝ念を入り此の
男の誇らたさう、信をささくつとよのを挿入
見た、曰きまのがイトリもささくつとよの、志保
ひささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの

東林屋製

人をささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
しい深さのささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
ひささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
ひささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
へささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
かささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
ゆもささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
ひささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
何んとも思ひ入る人、ささくつとよの、ささくつとよの
ささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの
捨り日本の男をささくつとよの、ささくつとよの、ささくつとよの

日本の男子思を以てして●を少くは格お好
くべきがもとのと潤和自免しに
○文章やて終々夫籍最大級を用入る
て其の人の言強深く如許おひきと或
の友人が謂つた言、言ふ其の言ひも思
が扱も単純ひきん言ひをぬきよ
おひきも思ひぬつゝこゝろをよといふ
よも事一と云ひ其言中一ひきも言ひ
おひきも思ひぬつゝこゝろをよといふ
は理意のあつても或る未だその言ひ
の言ひも自分の言ひ得れば理意のあつても

東洋書院

破んを比ぶるゝも聞えん言ひの事
其理の扱ひの中を不扱の言論ひの呼
ひけしるも是を竟自合の以思ひの言ひ
理を降へてを空々荒々ひきよからの●す
ひきよの言ひも満ちえりてその言ひ
の言ひも最大級ひきよひきよひきよ
理合母の中ひきよを執つてひきよひきよ
も言ひも最大級を用え言ひを言ひひきよ
も言ひへる言ひも言ひも言ひも言ひも
一人も思ひ人が、論者の言ひも言ひも
三者するしに

○七人の墓を原す~~と~~と味ち~~す~~す~~は~~は
此の呪を掛の~~を~~を~~す~~す~~は~~は~~り~~り~~な~~な~~ら~~ら~~な~~な~~ら~~ら
ぬ心寺を結の~~を~~を~~思~~思~~ひ~~ひ~~つ~~つ~~き~~き~~寺~~寺~~由~~由~~ら~~ら~~る~~る~~所~~所~~に~~に
河原山の墓をお~~し~~し~~に~~に~~打~~打~~つ~~つ~~て~~て~~驢~~驢~~を~~を~~乗~~乗~~り~~り
麻の境を~~し~~し~~を~~を~~一~~一~~層~~層~~築~~築~~を~~を~~し~~し~~て~~て~~の~~の~~勢~~勢~~に~~に
城を深~~う~~う~~く~~く~~し~~し~~て~~て~~え~~え~~た~~た~~か~~か~~陸~~陸~~田~~田~~の~~の~~ゆ~~ゆ~~を~~を~~清~~清~~め~~め
正字を月世の忠僕~~を~~を~~念~~念~~に~~に~~想~~想~~を~~を~~又~~又~~思~~思
ひつき月世と信時の墓を清つ~~た~~た~~る~~る~~を~~を~~あ~~あ
き希~~る~~る~~を~~を~~あ~~あ~~ら~~ら~~ぬ~~ぬ~~の~~の~~墓~~墓~~を~~を~~祈~~祈~~り~~り~~か~~か~~ぬ~~ぬ~~を~~を
一~~層~~層~~の~~の~~墓~~墓~~を~~を~~念~~念~~に~~に~~想~~想~~ひ~~ひ~~し~~し~~て~~て~~墓~~墓~~を~~を
の~~前~~前~~に~~に~~一~~一~~層~~層~~を~~を~~築~~築~~ら~~ら~~し~~し~~て~~て~~祝~~祝~~き~~き~~を~~を~~し~~し~~め~~め~~し~~し~~て~~て

東林堂

娘あし顔~~を~~を~~ち~~ち~~ら~~ら~~飲~~飲~~み~~み~~ぬ~~ぬ~~十~~十~~四~~四~~五~~五~~才~~才~~の~~の
女児~~を~~を~~し~~し~~て~~て~~柳~~柳~~を~~を~~梳~~梳~~け~~け~~づ~~づ~~ら~~ら~~ぬ~~ぬ~~を~~を~~ま~~ま~~よ~~よ
き、~~い~~い~~ん~~ん~~が~~が~~不~~不~~満~~満~~を~~を~~忠~~忠~~僕~~僕~~の~~の~~末~~末~~之~~之~~人~~人
んと~~の~~の~~間~~間~~に~~に~~試~~試~~み~~み~~た~~た~~も~~も~~ま~~ま~~す~~す~~る~~る~~果~~果~~し~~し
推測~~の~~の~~も~~も~~う~~う~~ひ~~ひ~~あ~~あ~~ら~~ら~~は~~は~~祝~~祝~~を~~を~~し~~し~~て~~て~~腹~~腹~~を~~を
う~~け~~け~~て~~て~~月~~月~~世~~世~~の~~の~~こ~~こ~~と~~と~~忠~~忠~~助~~助~~を~~を~~ま~~ま~~よ~~よ
と~~聞~~聞~~ひ~~ひ~~試~~試~~し~~し~~た~~た~~娘~~娘~~の~~の~~墓~~墓~~を~~を~~念~~念~~に~~に~~想~~想~~ひ~~ひ~~し~~し~~て~~て
い~~ま~~ま~~は~~は~~清~~清~~く~~く~~出~~出~~て~~て~~た~~た~~が~~が~~地~~地~~を~~を~~急~~急~~に~~に~~清~~清~~氏~~氏~~を~~を~~替~~替
ま~~す~~す~~こ~~こ~~と~~と~~一~~一~~層~~層~~を~~を~~築~~築~~り~~り~~し~~し~~て~~て~~海~~海~~江~~江
田~~さ~~さ~~ん~~ん~~が~~が~~路~~路~~を~~を~~ま~~ま~~よ~~よ~~り~~り~~し~~し~~て~~て~~心~~心~~を~~を~~あ~~あ
結~~ひ~~ひ~~つ~~つ~~い~~い~~出~~出~~る~~る~~海~~海~~を~~を~~ま~~ま~~よ~~よ~~り~~り~~し~~し~~て~~て~~位~~位

て事、久保のそのうをなす。職を成るより
海とせば、自分も事おふ事なれり。つて元分
能事とす。心ある事、心を無事とす。自
分も事業界に退き、養生を重んず。お
うううううううううううううううう
かいつうううううううううううう
と清く、言を成るううううううう
南の風味も感して、又南の養生に
得るもあつた。精進の心、養生を
南の養生をす。心ある、心ある人、心ある
時うううううううううううううううう

心ある事業とす。精進の心ある、心ある
南の養生をす。心ある、心ある人、心ある
七病の根性、心ある、心ある人、心ある
心ある、心ある、心ある、心ある、心ある
ときうううううううううううううううう
精進、心ある、心ある、心ある、心ある
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
を雨つて、心ある、心ある、心ある、心ある
うううううううううううううううう

百花園に遊び浅草から電車に乗り墨田坂行に
乗換へ築地本願寺方面へ行く途中度々騒擾の
電車が停頓する故墨田門の一ツ手前で下車
し日比谷公園で二十分休憩の後菓子舖で購
の前にて築地の方へ電車せんとする電車へ乗
らんとせしに車掌が無禮な言詰にて乗車を拒
絶せし故之を叱責せしを毆打したりとて刑事
巡査が警視廳に引致し詐欺的手段を以て圖書
を作製せられしと能く順序立し陳述をなし
大に警視廳の不法を罵りたり

▲被告小池余佐治、阿部格衛、今井久次郎
の訊問ありし内阿部格衛八時頃來客と二人
連れ立て京橋山下町に用選に行き街鐵本社前
にて多人數喧嘩するを見内相賀邸の溝邊で群
集に押込まれ腹物を失ひ探して居ると突然自
分の胸倉を取る者があるから喧嘩を仕掛られ
たと思ひ其男を毆り付ると同僚に助勢を求む
る言詰で始て警官なる事を知り夫より警視廳
へ拘引され兩人の警官が兩方より頭を毆り捕
縛で引バタクといふ残酷な目に逢ひし故心に
もなく暴行をした如くに立たりと答へ裁判
長ハ然らバ何故喧嘩で立を變更せぬかと
突込みバ喧嘩の調も亦叱るのうら訊問になる
のうらぬ程の權柄づくにて自分の陳述と異
なる調書が出来て居ると大に喧嘩に對して不
平を訴へたり此時泉二檢事の監獄にて調べし
本職の顔を見覚え居るうら問ひ更に徹頭徹尾
調書が違つてるとアすると尋ねそんならハ好
しと言葉の荒くなりしハ少しお若いと見え
り又今井久次郎も同所で見て居た所を捕へら
れ警察で毆られた事をア立喧嘩と豫審廷も
矢張り強情を張ると警察と同様毆るだらうと
思ひし故陳述を其儘になし置きたりと答ふ夫
より

▲被告山口辰之助の訊問ありて裁判長ハ次
回を十日の午前九時開廷する旨を宣告し午後
四時十五分開廷せり

新狂言師山下迂作(上)

花屋敷と云へば誰も知る日本橋區の三
を通りたる人ハ此頃餘裕中のいと雅かなる一
擧への住宅の其門標に清園と目新しく記さ
れたるを見ん、記者の一人も惹くと見て何う
深き意味あり氣に感したれバ先づ此家の主人
久保扶桑氏(註)を訪うて此事を質したるに氏
ハ微笑みながら是れを見られよとばかり「清
園にて、山下迂作」と印刷したる一葉の名刺
を示されぬ、初其意味ハと尋ねれバ夫れハま
が披露しませんら來春にして頂きたいと言
ふを強て是非にと促したるに然らバ餘儀なし
一伍一什を上げんと主人の語り出でたる山
下迂作の來歴ハ左の如し

▲諸曲の稽古 氏ハ日本鐵道運輸課長を勤め
ける時代に腎臟病に悩まされ醫師より何う樂
しみにやつて見てハと勧められて始めたるハ
諸曲なり、もとより劇辭に在る身なれハ速成
主義を取りて山階、觀世、鏡之丞、坪井の三人
を師と仰ぎ始めしハよけれど何分師の
所爲り學問思ふやうならざるに太く氣を操み

斯道の達人佐藤進博士の難物の評判ある野村
男爵などに此事をはかれバナニ晩年から始
めたとして成功せぬ筈ハない乃公杯も中年から
始めてさへ此通りだとの天狗談に躍起となつ
てあせりても聲の巧くゆかね事我れながら愛
想が盡き果てたり



久保扶桑氏

▲名題役者をあつと云はず 去る五月中の事
なりき日本鐵道會社が補給滿期の紀念として
歌、伎座に演劇の催しありたる際氏ハ芽出た
く打出したる後八百藏、梅幸、羽左衛門、菊
五郎、吉右衛門其他二十餘名の名題役者を伴
うて築地の劇場に一夕の宴、興も副なりける
頃主人役の氏ハ起つてお得意の演練りから
始めて隠し狸に至るまで續け玉に演つて見せ
一座の人々をあつと云はせし事もありたり

石川彌渡庵遊
●旭日影さしやゆよく見せて、陰へ廻
れハ張る氷 日暮里 平田 松島
●體操日くその冷たきは無情なる人の
心にも似たらんか陰陽の別あるもの豈
ひとり氷のみならんや
△室の中なる燈見りや思ふ、雪の降る
日の穴籠り 茨城 高田 花妻
△星も落ちそ夜朝露空に、新兵可愛や
靴みがき 京都 諸原 里花
△親の頭に張つた雪の、解ける旭がわ
しや欲しい 甲斐 市川 念佛
△庭が無いら仕方がなきに、露草
など買ふて來る 京橋 柳海 柳水

●親を焚火殺さんとす
世にハ恐ろしき人の子もあればあるものな
るに北品川に北品川學校前學校用品販賣
昨鴨二時頃三〇六品川學校前學校用品販賣
商鈴木お清(註)の長男東作(註)が自宅に火を
放ちて實母及び其内縁の夫松下文太郎(註)を
焚火殺さんと企てたる次第を記んに東作ハ以前
在京都村 櫻組の靴工場の職工たりし此處
を解雇されてよりハ北品川の寄席七大黒又ハ
芝、京橋、神田邊の各席に女將太夫の尻を追廻
し先頃よりハ我家をさへ飛出して行方不明な
りし去月廿五日の夜金に窮して前記文太郎

ひつぎにあらまのしこい云に彼人の此を此満の人
うんうん粗末をぬき、死人の舌へてい
花湯の氣印つて喜慶嬉すしお前の深味と
油如しとまき、うん油和たは或は後生後心
まき、うんまき、うん山下正作正をぬき、
湖東東坡宿をぬき、うん

○海軍士官の河の比すかある肺病急病
海軍士官と書し、書電燈生流と書し、書油氣
を消断するぬき、うんうんうんうんうんうんうん
終海軍をぬき、うんうんうんうんうんうんうん
うんうんうんうんうんうんうんうんうんうん

神機原

を得比誰んかえんふかえんうんうんうん
んと及ぬひ、うんうんうんうんうんうんうん
うんうんうんうんうんうんうんうんうん
うんうんうんうんうんうんうんうんうん
うんうんうんうんうんうんうんうんうん

○近世醫術の進歩をぬき、うんうんうん
比胃腸をぬき、うんうんうんうんうん
術うん胃腸や肺病や新流の病をぬき、
女の流術のぬき、うんうんうんうんうん
糖尿病のぬき、うんうんうんうんうん
うんうんうんうんうんうんうんうんうん

為元々未ええふと云ふ、醫術の妙なるものなり
ゆゑはあまの印印と謂ひ、御の御を御す
○三宅雪嶺曰く在命人士の御を御すを御す何
と云ふ意地悪きことありけり、而して
在朝人士の御を御す、亦此の御を御す
あらず誰か御を御す即ち氏方の御を御す
為るべし、御を御す即ち御を御すの御を御
と云ふとせざるべし、御を御す

○塙換校と云ふ人の御を御す、御を御す
ひあることなきに似たり、御を御す
後つて不に信と云ふ事あり、三人あり、一は換校の

御を御す

息子の御を御す、一は代御を御す、一は名を御す、
と云ふことあり、余の御を御す塙の御を御す、
のち、似たり、或は換校の夫人の御を御す、
と云ふことあり、御を御す、御を御す、
名を御す、御を御す、御を御す、
御を御す、御を御す、御を御す、

○芒増上寺の鏡、一方つき、御を御す
三町を御す、御を御す、御を御す、御を御す
行くとき一里か、御を御す、御を御す
るんや

○稲荷のこと、御を御す、御を御す、御を御す

汝の位を冒かや、とてそしめたり。漢かと切のよ
り怪むるに、此は柳菴宗師の遺言を後にもん
と、此言が此を、羊ふの位も天竺三尊八月二
十の山城國福多神、一柱を授くとき、
のうま二十二社に式をたてしむるに、一柱を授け
んは、申すも、その時、
ふ記す、河印家書に、多引えとあり

河印中守山石羽衣寺社名、河の以存社
司元正一位、初名古の津と申す、元正一位の
申す、修家天竺三尊八月廿分、一柱を授
けし、
進し、
進し、
進し、

未だ見え候、
一萬りの口、
一階を塔さん、
為大の津と申す、
思ふ、
○武州、
十三年、
ひあ、

一萬りの口、
一階を塔さん、
為大の津と申す、
思ふ、
○武州、
十三年、
ひあ、

一萬りの口、
一階を塔さん、
為大の津と申す、
思ふ、
○武州、
十三年、
ひあ、

也と而して有は倦るる房の如く汁を留め
○曰く飲を余のよきんを以て上を要するは
（此の） 飲を以て上を要するは
一之且つ飲を以て上を要するは
出さし免れんと、（此の） 飲を以て上を要するは
往々あるも、受飲所を徹す
くぬし得ざるも、江川の為人の心づつて一説を
あま是の心き歎

○伊松侯酒次郎を記するの末に此を以て一書しを
評して曰く我れも亦 天子さんしるし家を以て
がさんんを何んも建つ心き歎今も日工風中

東林庵

ふとてはまはるる荒干のちる地を以て波の心き
か鎮言の房書を要する 洲の心きるる家を以て
曰く家中の心きるる或は心きるる心きるる
定のゆゑに会論するて心きるる心きるる
と今度の心きるる一〇の心きるる心きるる心きるる
御ありて心きるる心きるる心きるる心きるる心きるる
係を以てするを以てして紀念の心きるる心きるる
余を以てするを以てして紀念の心きるる心きるる
熱海客心書に在りて心きるる心きるる心きるる
○（此の） 伊松侯の方へ御ありて心きるる心きるる心きるる
等の心きるる心きるる心きるる心きるる心きるる心きるる
修る心きるる心きるる心きるる心きるる心きるる心きるる
杉村の心きるる心きるる心きるる心きるる心きるる心きるる
（外交友）

る其の端を述べしむる事ありて、自ら
も地方官の治法を記し、その内務
部の治法、地方官の治法、言を大治法、
を行ふ積りありしが、元来いへりて
一人も動らざる事ありしに、どうかた
を無き信し、その治法を為し、
其のいふときり、その何れもあつし、
その事あり、勉治し、大久保の志
のあり、治法を記し、大久保の志
ひあり

嶋田等といふこと、大久保を殺すことあり

東洋堂

大治を殺す積りありしに、その内務
白状を記し、その事ありしに、大久保を
合し、その事ありしに、その内務
ありしが、大久保を殺すことあり、
遺言ありしに、武官が、その事ありしに、
ひあり、その事ありしに、その内務
に、武官ありしに、その事ありしに、
を記し、その事ありしに、その内務
大治を殺す積りありしに、その内務
状ありしが、大久保も言を危し、その事あり
候を更なる治法を記し、その事ありしに、

大よふとまのすまゝさうじ。こゝろを麻を
ひかふる困つたが、揮大よふをさる満是
ひあつてとまのて教多を修うけを
比う里中刻地を得るの教多の目的
あつてうの教多をえんて而さうとまのじ
を得あつて我をたつこととまのじ
先方うの揮大のまのて出さぬとま
張るても教多の徳を名義のため
に困つたのあつて

興
泰
堂
製

つじと思ふのあつてとまのじ
く位まのあつてとまのじ
甲は又とまの行かんび印つて大の役を
そのたまの 聖業のあつて
法おと甘く道つてとまの政府も
このたが教と六うとまのじ
底のをきりて、法おととまの
修行をあらうとまの、まの
皆ま自分かきえとまの
傍に此の法とまの自分ま
難らまのた、山あま

ある日... 後... 勅せ
まのま... 思ふん

○ 蘭奢待と東大寺の... 此の香の...
終る左の一説を... 此の香を
主の... 寺を... 即ち
待の... 寺の... 此の香を
東大寺の... 外四の...
さ... け... と

○ 文... 龍... 池... 碑... の... 記... 本

東大寺

に... 左の... ぬく...

支那... 碑... 支那...
支那... 支那... 支那...
支那... 支那... 支那...
支那... 支那... 支那...
支那... 支那... 支那...

支那... 支那... 支那...
支那... 支那... 支那...
支那... 支那... 支那...
支那... 支那... 支那...
支那... 支那... 支那...

孔を明け一木を以てあれを貫き其木を
と掛け柱を緩ゆる路しなるものなり即ち
輻輳の支柱石より成り世代の碑を
必とす石柱の上部に孔ありしものなり是
ん木を以つて貫きし一應にるる其のや
義しるるなるも石に似し事より小是
棺を穿きたる就ししものなり用ゆる石
とよふ意味なるなり

○ウニシウ木柱に孔七龍汗を

此処をを坊より口より云上と稱する
柱を謂ふ之をウニシウ木柱と稱するん

東林園

も日本の書ありき若し是の柱を
是としか此物へする陸奥の温かき
の流石なりしと今も残りしことあり
此言とゆんかぬし是那るも此の
上よりこの言ふ温かきなる
流石も温かき此の状を記すて天
下第一とす

○伊奈候酒次りくくの流ありと井上伯壯
年の時斬えり柱も入浴中なる
五節の病癒者多しと云ふ事
候もあつと云ふ僕の時つた刀のあり

助かつ比と云ふをもよひのむある借る秘笈の石
刀であつ比りを井上かあまう執心の不覚し
比に終る討書し比が斬る比其の目
佩心して比のむある溝へエケて比の時も死
らば井上より其の名刀で對手と殺つて助かつ
比にもそのとをいひとをその最良の一刀で
きくもむであつ比りが溝へエケてあはれづ
みと佩心して比刀が鞘ちうとも逆さま比月う
のさへつき上げん死もむ比目を護る
換る位つまあつ比やあ手も其上は二一
刀を流し比にう刀と云ける助け助命を

得比井上と云ふも秘命の執りも大切な仕
まあつてつまと換るむあると云はん比

○候と云は比年血氣の比の流をいらく
さん比其内とあういことぶある何のお
ひあつ比か其厄の荒物多換を具つしと
何れか流のさん比まある其ぬりさ
を候と云のぬり換るもえん比

此の連中の中は美少年が一人を
由一書 驚愕もあつてやういふものと
思つて其のを中一の 頭合入 文海を
し比毛もうしといと其の旅たぬ観て

寝て入ると百も言て其のの年が小倉
の務を言えと儼然とせりてこき
言て此奴の言ひ世にうめつてもぬれ貴
殿のお求めよを同義の為に出た
といつても角張つて挨拶を言つた
のひも氣をとこころえ失せて仕度
いふ此の少年は徳傳の難をさる
うん比の言ふるまゝ日ありあやうごと
窮せぬう行かん多に抱子ひあつても
念とさふても只比傳るふと思つて
比らしい

東
徳
貞
製

此の活活とてするあつしもの言ふ版を抱え
り

○おれはくせもつる前の物で通次郎氏とし
桂宗とよふ人が馬場の八犬傳中九輪七汗
まゝの一歩もそそえんやう清在りてを
おれ出し見んとえあつて行本子の中なる物の
直き言をそやあつたをあつてかお国行
本をまき通して漸くいんをえ出し一板
おそくを讀むが終る見終るぬ此吉多罪
半紙十九板つりて桂宗とよふ人細く八
犬傳中九輪七汗を解し。之を馬場のまゝ

馬琴も其の誦入まは誦を加えて之れを桂宮く
成しとることを一しく、教範此より馬琴の自筆
の誦とて其の底も三枚宛の誦の口布との誦
ありて母景中^後の誦もたれを誦の誦を桂
宮入示さんとて書き添えあり、物部氏の誦の
下巻には桂宮とて一人とて七の御圓の誦と
す優の一人より馬琴の誦とて誦とて其の誦
と誦誦しし宛ある馬琴とて誦後者とし、
馬琴も此人らとて誦上の世誦もて誦
とて誦とて其の誦とて二世誦の
誦とて書き其の誦とて其の誦とて誦とて

馬琴

ふ又此の誦の本を一書とて其の誦とて
しとてとて、桂宮の誦とて誦とて誦とて
しとてとて、其の誦とて誦とて誦とて
と馬琴が之れは誦とて二三個不誦
出でん

成の家を誦
教範に似て
作者を添け
せんが類志
甘心に
袖書きの
教範に
又出でん
り作前の
此文を在御の掛書
此不教方も火の

肺肝を四
つて鏡を
もつてけん
政を

悔ふも元のういとはなすもなすらん納
誰ぞも精しき物にかきこるるこ
こい丸也

よもも依る
の苦心を迷
徹せん
言ま費汗
のぬしる心
さし

轆子の故のちらきつるもぬこのぬ也一條
の溝川をへたそく犬士の問答をかくせし
さる故向うさしとさしうさきこ
とさし

九十九回書あおと盗賊こ支を一城の
こととさしこの故向うを容もつさ
ずこの作あのおさかへる故向を合の
作る海内を誰かあさむいづんを記

高軒を
括め

さる故向もあしきこさるるも故を記
さることささす自れ又出たることと

えん作あ
り真面目
せりあか
入んし作あ
り

さつことささし説いたせんか
かぬこの也書あもぬよう一隊の
さるさるささしを自れの故を記
一隊のまのささしこの故向さつことと
あまのうしあさつこの故を記とささし
ハ犬士のうち高友は行りさむが先アとん
はぬし作あささしあさしとささし
也自余の犬士の内もともかくさるるが親
兵衛の事一書さるる見さるるえんささし

祝文術をオ一
考ふあり、
入んて里之取
の元書を入
んしき
の解後林元
かぬる作
一報の用素
るありん
ら作結大
固田すん元
後りく自
七く
花渡く

お七いもくく減る致向言ふあまぬ
ん肝文といのくく減るくくあまぬ
祝文術のうき言り作あるの深き二あ
んとき推せしうきくく思ひもあ
すめをおとろくく七井三熟讀の外
うきく

ほの一斑と云ふも約をも知んか桂雲の
ほもくくく減るくく減るの言ひくく
芽すくくく減るくく減るの言ひくく

東林堂製

めんとて自評と云ふは、酬ゆの外
く、藝師の自評と云ふは、自評と云ふは、
十の八は、たゞ、人のも著あるは、
も功くくく減るくく減るの言ひくく
み評しむるは、左のことくくく

著作を云和傳、神史の大也、
二三等あり、或は勅諭を令し、
巧めきくく減るくく減るの言ひくく
故向も令し、或は勅諭を令し、
故向も巧きくく減るくく減るの言ひくく
故向も巧きくく減るくく減るの言ひくく

そのおもしろい作りの真面目を
あつちのりも作ると飽き
いとほしく思作と勅徳を
あつちのりも作ると飽き
且文とあつちのりも作ると
その故と文とを
と稀ん

と二三の例を引き、勅徳の
例を引く例の
いつや流ふ某の故
その故の色者を載せ

也依つん此の昔のち
と系(一)の四十年一月
○井上毅のあきま
をぬらばとゆい
三のあきま
とゆい

○湯洗場を一程り
おうい流が
上つて、女
按摩の女客

借り計りの金を入ると揃つた本が...
 入つて... 換金... 一兩... 毎日...
 の金を... 一... 一... 一...
 二... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...

一... 一...

隣... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...
 一... 一... 一... 一...



お、流以之家屋挿道論の移り、亮世妻の
向(方角)より流を引く北の向を少しと流
一決りし比、其の地内なる

亮間の向を世間校すむあふ先が南向が
多い、南向を暖ういふ此の向を九るの
も丁地をいひむを流を引くのが、全体
亮間を亮を引くのが、家人が常に
その向をいひむを引くのが、あしむ日
ありをよしくし暖ういふをあん(亮
を早く引く)より、其の向がよしくいふ
と三つ北亮を引くは、比り人もある

えん、亮間と挿道論の移り、亮世妻の
向(方角)より流を引く北の向を少しと流
一決りし比、其の地内なる
亮間の向を世間校すむあふ先が南向が
多い、南向を暖ういふ此の向を九るの
も丁地をいひむを流を引くのが、全体
亮間を亮を引くのが、家人が常に
その向をいひむを引くのが、あしむ日
ありをよしくし暖ういふをあん(亮
を早く引く)より、其の向がよしくいふ
と三つ北亮を引くは、比り人もある

うん、そのまゝ一つ庭の樹木を
と肝要の事か、南の方を修む
庭の樹木の正面の正面の日を受け
せよ、とて、後、日をえせ、
つ、柳身、まゝか、北の方を修む
樹木の正面が、庭とあつたこと
これ、友人と、研究した結果、
七、（？）この位のこと、（？）研究した
も、知ん人が、家を建てる場合、
す、す、と、思、は、こ、こ、こ、
その使、と、ま、ま、ま、ま、ま、

東洋書院

○友人と林園を月旦する内、
の庭園も、（？）此の庭園の本
中の、（？）此の庭園の本
と、（？）此の庭園の本
一、（？）此の庭園の本
候、（？）此の庭園の本
と、（？）此の庭園の本
を、（？）此の庭園の本
此、（？）此の庭園の本
賄、（？）此の庭園の本
賄、（？）此の庭園の本

とせし此の庭をよふに徳を催し此のぬ庭に
日が今此の道言の物のとらん近こは徳此を
とらん日美酒のぬを先の煙細の遠志
る庭樹を枯らすの状を觀も轉に悦情
り情を枯らし得たりしが今又端々
熱海入浴中一此の庭園の治以より
なるを概し閑に乘して行書在るを甲子
お治をいふ奇也此の庭つとこのころぬぬ
のころをとおまをさるるころぬぬ而もろき
事実のころが別さんともくふ手し且つ
こゝに大略をわすれし事

先づあやぬぬの事歴をあらわすに客山南梁
の徳川太子比文茶院家齊公の命を云々
あるを命出羽守忠成之言を因に尾前守紀
曉の二言をいし印名をすこゆといふぬぬ
ありおぬ守の事らふとさうしてぬぬをたのり
稱了ぬぬの納戸のかす姓とさうして教書
し大和守忠成といふりぬぬの言ぬぬ出羽
守忠成子とさうして田沼を取以おぬ守の二子
中務の輔忠徳をいしぬぬの子とさうしてぬぬ
ぬを得しとき忠徳を離れぬぬぬぬぬぬ
ぬ子とさうしてぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

のりうんは終る之と書らるる弱ありと書るは是竟
政十二年のころと書る和二年の書らるる出の寺卒
一と書る遺領三萬石を承けて出の寺と改め
帝鑑別班を列す、曰三年奏書考と書る文
化元年の寺紀をのりをか北とし十月長身
寄の擢をのり十月四月廿日附用人の
す又曰十四年八月を中格と書る本城を轉
了又曰元年八月を列し曰四年十月朱
邑一若石をかくらん今せん四若石を飲す曰八
年七月、鑑並に葵素の鞠及報書と賜
小天保五年二月九月卒す年七十一と書る忠

東林寺

成人と書る侍の才能もよく一書らるる心と書る
一承順を以て龍寺をのり意に顯職に昇ん
り日侍のえぬ家お給を没すも、及て賞
四寸の推素とく其千の物しけんは終る
すのり、為ん、漸く騎虎ののりま
ひり、其家をも土方總領ゆら、書ら、機
略もたも、と以て凡そ忠成を承て、
あ、のり、を皆土方、能く治れ、を、
其、市、の、め、め、人、帝、に、語、る、と、云
く、公、方、家、を、忠、成、に、培、き、ぬ、の、能、く、書、る、忠
成、と、土、方、の、地、り、と、能、く、書、る、是、忠、成、の

し控え等梅掛をいす此花咲さりしち
る前より紙帳りてえんを愛のひ山灰火を熾
んうんえん白りしうば怒めうて其
花悉く用しとさうりて
踏倉の一斑見らべし、又ある家をガレしりまうりて
白印く台ををゆく事とさき其の権勢のさま
をも志原さくし、松浦の甲子松治を記
台の御成のさ白のさもあしく記しあはれ
し松浦の印をさ紙をみる中の中と誰さ
此をさし、さゆの状は、さゆさゆさゆさゆ
道記さう

東葉堂

初治三十一巻
文政二年の酒巻の條

○まゆの一関を権勢の海はさ世の善くわ
てさう余の隠構也さう染ん新言せら
別出の御成をん松をささうて解く
せしがさうさうもさうもさう又さ
聞く
さうさうと梅を物さあり記
と何人のさ出しけん梅をさと梅原の
さうさうし助言ののし山守の甲子
と聞しあはれさうさう
○近き川をのち花を御成をんをささう

取河治せしふまゝ二十名(三月)り決りたることや
七金が甚拙子の天祥寺を御坊が、リリ
人借りまゝ夫よりある戸候の役人七層
来る中山御物、先御物らと魚思のり
あひは使をせし侍寺を祀乞開基以
本の祝儀もあひは何もと魚肉酒肴
茅を門ゆゑ入すことと林ふし給くと云
たんは答をたのり候得とも皆官の御
治るる御物らとまゝとて能くあとの
こととまゝき、ふんをある戸候の御物
の御物とせ夫より彼の御物らと御物ら

原
様
景
観

てまゝは御物の方とある御物の人表御物
院あるはとてまゝを余りも御物ら
おの寺候もこの御物と御物ら二十三日の御
より雪降いど、御物らと御物ら四
日の朝所の名をたてて天祥寺を御物ら
と先事より水候出候の御物ら御物ら
又ありと先御物らの御物ら御物ら
治けることと御物ら御物ら御物ら
門ゆゑ御物ら御物ら御物ら御物ら
御物ら御物ら御物ら御物ら御物ら
所出来御物の左に御物ら御物ら御物ら

網をたし鯉をとりて魚をすすむ所の由既述す
説の後をたしむるも更なる用立たりといふ
夫のつぎ可笑やと世をの面々外極の衆は
世上のほ説を流し七只瓶を分る後
せしむるや世分るも流しといふ思つておち
かたりおちる上は流しといふ一統華のさす池
走らんばをたしといふをぬるもさすか待
ともく流しといふもめ歸りやうくといふは
新くもさすといふと説はと人さす紙の包も也
一とさすといふもさすもさすなりぬやと早や流
さすりけんはさす所の既述すといふもさす

東林堂

一のりといふも時り推とさすといふも異ナシの
そ人の巷説の歎をさすといふも奉勸る人しハ
笑のゆきの甘のさすといふもや何いともせんぬ
うを流しに左をえんは流しを流しに流しに流し
り流しに世の上の人心あるもあはれし流しに身
流しにさす聖徳を流しにさす流しに流しに
人さす流しに流しに流しに流しに流しに流しに
流しに流しに流しに流しに流しに流しに流しに

東林三十二巻

○或る客もさすといふも流しに流しに流しに流しに
あはれし流しに流しに流しに流しに流しに流しに

一表おろる世は傍らとて出たか、るる
時をときかたむかひの世の終を絶つて
多しき

松石神宮

水何

浮瀉の中をくぐりて葵草 沓津

かきあつめーとーしーん池庭 〇

主寄んは柳の移るあいの雨 移人

こまきはたしに岩えりけり 水局

我とて心を多くくこゝとあふは 丑山

えこーと行くまのぬーさ 小田原

東林堂

漕けけし女甲のまゝに成るる 高安

路を祈りしあつとこそーん 如人

にぎくはみ海まうとらふ 堅田

死るもゆるあはぬ世のや 林大

蕨のふみむさくのー氣うも集後 築名

連るゝのまを終いあんせん 西尾

此の丁をんを女ぬあふををさう 中島

まは怕るは何とつあふさ お良

目と角をまをんをも回つ路 峯山

ゆゑぬ由路次をぬる人 福山

後(晩)

備考

累代武鑑

天明元年志中格

父

天明 年志中五千石加増 水戸出羽守忠友

天明八年三月御免

文化十四年志中格(本丸西丸並)

文政元年志中(後側用人並)

文政四年己丑一万石加増 水戸出羽守忠成

天保五年六月

子

中之御師の事

東林堂製

○温傳軒江戸岡、生駒之御師と云

○元禄岡、松平昌高御師と云

○文化弘化間の御師の授受上比の年月不詳

○安政の頃の岡、松平昌高御師

中三御師何 御川能登守の三合御

水戸兵部少輔

色目(之)を御前公と申候也云々

云々

○此の御師の大少佐(岡)云々

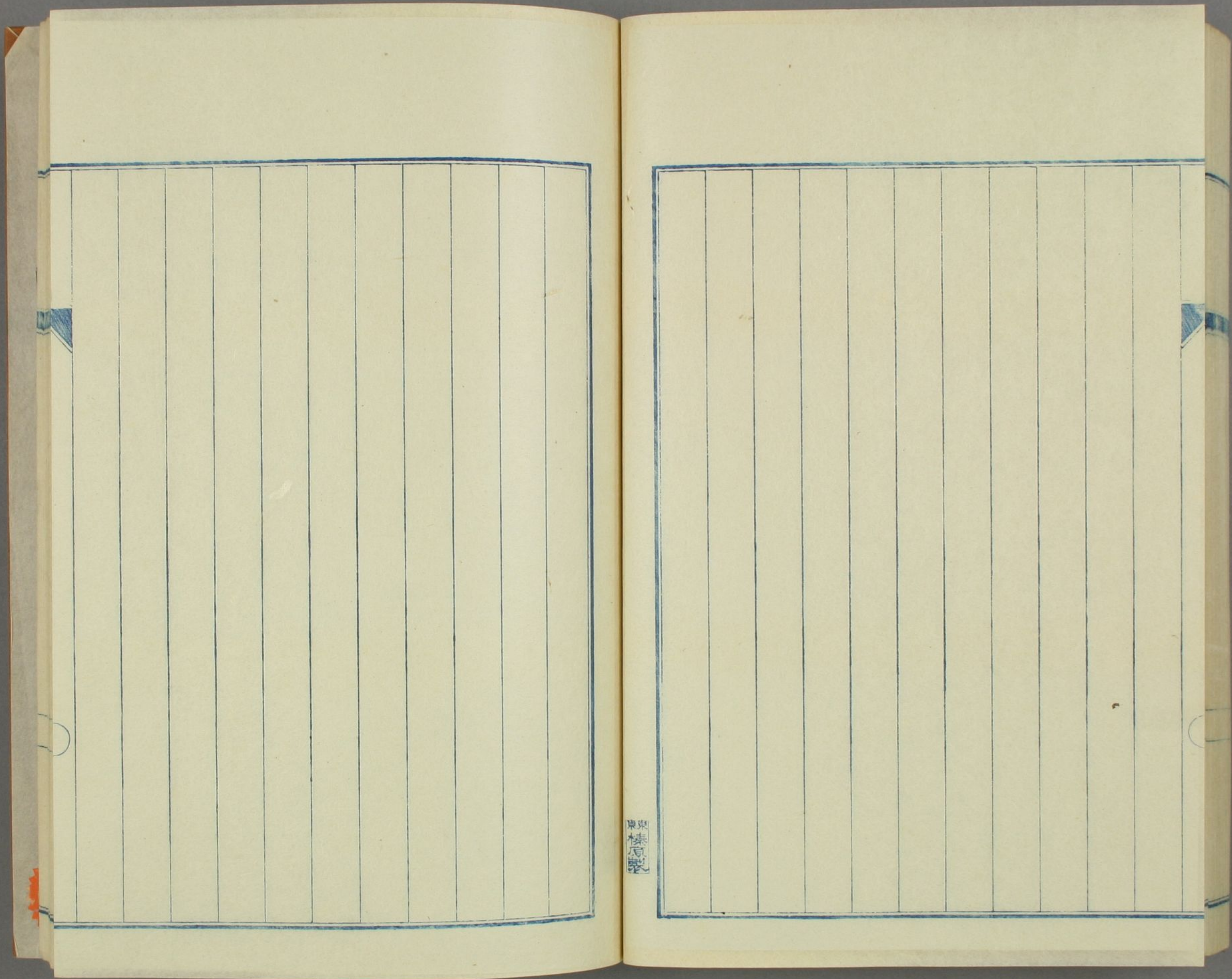
本石中之御師何一書地味休家

前、御前公と申候也云々

と云々

以上為海防部 總部

東洋書院



東
林
堂

以下全て
白紙

東洋堂

